

暁天講座 朝の法話

七月二十五日（水） 六時四十五分〜

前大谷中高等学校長 真城義麿 先生

講題 「安心してがんばれる世界を」

七月二十六日（木） 六時四十五分〜

前同朋大学学長 尾畑文正 先生

講題 「浄土でまちまいらせそうろう」

七月二十七日（金） 六時四十五分〜

東京教区 蓮光寺 住職 本多雅人 先生

講題

「本当に救われるとは」
〜悲しみのままに開かれる世界〜

*パンと「コーヒー」を用意しています。



第12号
平成24年
(2012年)
7月・8月
・9月号
発行：編集
岡崎別院
輪番 福田 大

「**女**、**起**ちて更に**衣服**を**整**え**合**掌恭敬して、**無**量**寿**仏を**礼**したてまつるべし」
〜仏説無量寿経 卷下〜

先日、当院本堂の大屋根の土が大量に落ち、鬼瓦が傾いた。参詣者の安全を確保するための緊急の補修工事を行なった。余儀なくされた。その現状の中でいま建物の補修に追われ、ただ建物を維持することばかりに奔走しているのだが、はたして世の中からほんとうにお寺が必要とされているのだろうか。いまさらながらそんな愚問にも近い、急務の問いが私を襲ってきた。

昨今の定例法話や各教化事業での参詣者数の減少、直葬、友人葬などによる宗教抜き葬儀、法事や月命日のお参りの減少などの事柄からも、けっして世の中から必要であると思えないお寺の現状がある。

お寺離れの要因と考えられるところでは、宗教書の氾濫、インターネットの普及により、わざわざお寺に来て仏法を聴聞しなくても、自宅で好きな時間に好きなだけ、

庭園紫陽花

一昨年に寄贈のあった百三十八本の紫陽花が今年もきれいに花を咲かせた。



本堂前睡蓮



山城第二組交流事業 史蹟ウォーキング

山城第二組では寺院間のさらなる交流を願った事業を行っている。今年度は五月三十一日に別院近隣の安楽寺・法然院・真如堂・金戒光明寺などの史蹟を回るウォーキングが実施された。そのあと別院で懇親会がもたれた。



伝研に参加して

今回、二回にわたる伝道研修に参加させていただき、法話実習を通して、自分がいかに何もできていないかに気付くことのできたよい機会になりました。

これからもこのような機会を大切にしたいと思います。（竹中）

自分流に自由気ままな聞き方が容易にできるようになった。そこには、一緒に仏法を聞く師や友と顔を突き合わせて話すこともなければ、服を着替えて法座に身を据えることもない。仏法聴聞は、かならず人を通して聞くことであり、談合（座談）を通して自分に聞こえてきた仏法の確認をするところこそ、仏法聴聞のほんとうの大事さがあると、蓮如上人は、「一句一言を聴聞するとも、ただ、得手に法をきくなり。ただ、よく聞き、心中のとおり、同行にあい談合すべきことなり」というお言葉で、五〇〇年以上前から警鐘を鳴らし続けている。

現存のお寺の堂宇を建立された先達の願いは、人を通して聞く仏法の大事な聞き方を、師や友とともに確認する場としてのお寺であつたに違いない。

では、実際のところ、いま私にほんとうに師や友がいて、真剣に怒ったり怒られたりする場としてのお寺だという認識があるだろうか。

安田理深先生は「壁にかけてある名号より口から出る名号、これがほんとうの生きた御本尊である」と述べ懐かれる。お寺の中心は本堂であり、本堂の中心は御本尊である。御本尊（ほんとうに尊いこと）に遇えたわが身のうなずきが口から出る。生きた名号が響く場である。そのことを師、友とともに確認できる場としての本堂であることを、いま本堂の補修に迫られる現状から、先達の願いに立ち返り、この私一人こそが襟をただし座り直して、頭（あきら）かにされなければならぬと念（おも）うことである。



立野義昭先生



真城義麿先生



山口昭彦先生

去年開催された「清沢満之先生を偲ぶ会」が、今年も太田浩史氏の呼びかけにより、濱風講（ひんぷうこう）と名を改めて、

濱風講

へ別院往來

六月五日に開催され、山口昭彦先生により「教如上人と茶の湯」・真城義麿先生により「一人知と仏智」宗教なき時代の閉塞」立野義昭先生による「真人の道」を講義された。



茶道教室

茶道教室では、五月十三日の教室ではお茶会の練習が行われた。



宗祖を訪ねて

毎年三日講は聖跡参拝を行っている。今年は五月三日に聖跡参拝を行い、清涼寺、二尊院、落柿舎を訪問した。参加者は十二人であり、行き帰りはバスで、三か所は歩いて参拝した。



六月九日 挙式
木佐洋志さん
柳山紗月さん



四月三十日 挙式
高木 信さん
東條信子さん

結婚式



能教室開催のご案内

五月十三日に金剛流の宇高德成さんによるお能の教室が行われ、後には不定期に開催予定です。



山城第二組坊守会一般研修会
五月十一日山城第二組坊守会一般研修会が開催され、約三十名の参加があった。
福田大岡崎別院輪番から「お内仏のお給仕」という講題で「ご本尊」について研修した。

分陀利華

「雑毒の善」

ある師から「君が何でも自分でやろうとする意欲は貴重なことだ。しかし、かえってそのことで他人の領域まで侵し、他人をだめにすることもある。少しは他人に任せ、他を生かすことの大事さも知ってほしい」と私にとってはかなり苦言と貴重な御指摘を賜ったことがあった。
先日、長男の引越して家からの荷物出しの段取りや、足りないものの買い出しに付き合った。また赴任先まで行き、必要な家電の購入にも立ち会った。そのときのことだった。「お父さん、僕もう社会人やから、自分でできるから、もういいよ」という、息子から発せられた言葉に驚愕すると同時に、師からの言葉（前述）を想起させられた。
やらねばならんという義務感や、お世話をしているという、押しつけ

の親切心ほど他人の領域を侵している行為はない。知らず知らず、他人の領域にまで、土足で入り込んでしまっている事実がそこにあった。その自らのあり方に恥ずかしさを覚えながらも、そこから抜けきらない自分のどうしようもなさを、いま痛感させられている。
「他人の人間性を無視すれば、かならず自らの人間性も失っている」とは、和田稔師のお言葉である。自分の思い、はからいだけで生きるということは、自らの人間性も他人の人間性も失い、人間不在の世を作り出すことになる。
昔「わかつちやいるけどやめられない」という歌があったが、どこまでいってもわがはからの押しつけでしか生きていけない私、他人に迷惑をかけながらでしか生きていけない私ということが、私自身ほんとうにうなずけたとき、愚かな者として生きる大地に足が着き、人間としての歩みが始まるように念（おも）えてならない。

法座案内

三日講

宗祖を訪ねて

- 七月二日十四時 輪番
- 八月二日十四時 輪番
- 九月二日十四時 輪番

味読正信偈

- 七月十三日九時半 輪番
- 九月十三日九時半 輪番

盂蘭盆会

- 八月十三日九時半

長浜教区第十二組即往寺住職 京極真了師

定例法話

- 八月二十三日九時半 橋本彰吾師
- 九月二十三日九時半 大谷大学大学院生

秋季彼岸会

- 九月二十三日九時半 京都教区近江第十一組慶照寺住職 宮戸道雄師